

異世界で四神と結婚しろと言われました

序章

——二〇〇一年一月。

始まる前は気が遠くなるほど長い時間に思えた中国での留学生生活を終え、香子こうこは今機上の人だった。

北京ペキンから東京国際空港まで直行便であれば三時間半程度のフライトだが、この機は上海シャンハイを経由する為もう少し時間がかかる。

隣の席の友人は帰国が嬉しくて仕方がないようだったが、香子はとても切なかった。

香子には彼氏がいた。彼は中国人で、お茶葉を扱う店の店員だった。まだ見習いで給料が本当に安いのだと苦笑していた。だけど彼はできるだけ香子にお金を使わせないようにしてくれた。

レストランでいくらこちらが出すと言っても、彼は決して香子にお金を払わせなかった。お金がない時は彼の家に連れていかれ、彼が夕飯を作ってくれた。

彼は日本には行けないときっぱり香子に言った。香子も次にいつ中国に行けるとは言えなくて、お互いに別れを決めた。空港まで笑顔で見送ってくれた彼を、香子は絶対に忘れないだろうと思っ
たし、彼のことは好きだった。

この先、気流の乱れのあるところを通過するという中国語のアナウンスが流れて、香子ははつとした。

外すことはめったにないが念の為シートベルトを確認する。

しばらくもしないうちに機体が大きく揺れた。香子は持っていたバッグをぎゅっと抱きしめる。意識があつたのはそこまでだった。

なんだか寝心地が悪くて、香子は目覚めた。

（あれ？ 私飛行機に乗ってたんじゃない？）

視界に広がるのは青い空に白い雲。どうも仰向けに寝転がっている状態のようだと思ひ香子は判断した。視線を横にずらすと、青々とした木々が見える。

（地面に寝転がってる？ 飛行機もしかして落ちた？）

そっと身体を起こしてみたが、寝心地が悪いと思つた背中やお尻以外特に痛みはない。そして香子の意識がなくなる前に抱きしめたバッグもおなかの上に載っていた。

とりあえずバッグを開け中身を確認する。財布が二つ、パスポート、ハンカチ、ティッシュ、飴が少し、中日辞典、家の鍵、中国語の本、ポケットアルバム。どうやらなくなったものはなさそうである。

改めて周りを見回したが人っ子一人いない。

飛行機が落ちたとしても奇妙な話だと香子は思う。

香子が寝転がっていたのは青々とした草の上で、森の中でも少し開けたような場所だった。そし

てすぐ側に白い石を積み上げたような、昔は建物だった名残のようなものがある。

（これって、何かの遺跡とか？）

香子は万里の長城が好きだ。遺跡等を見るとときめいてしまう変わり者である。おかげでこんなおかしい状況でも好奇心を刺激されたくしく、バッグを抱え直して立ち上がった。

そして元建造物らしきものの側に寄り、まじまじと観察しはじめた。

考古学を学んでいたわけではないのでわからないが、遺跡だと言われればそうなのかと思うぐらいの風格がある。

そうして香子は好奇心に突き動かされるがままに、ちょうど手の高さにある岩にそっと触れた。

その途端――

ぐらり、といきなり世界が激しく揺れた気がした。

『……つつつ！』

あまりの驚愕に、香子は声を上げることもできなかった。

けれど一瞬後、世界は何事もなかったかのように平常を取り戻した。

香子は眉を寄せた。手は依然岩に触れたままである。もしかして貧血でも起こしたのではないかと思うほど周りに変化はなかった。

実際あれほど揺れたのだとしたら周りの木々が平常通りであるはずがない。葉や枝が風になびいてはいるが、地震による激しい揺れはなかったということがわかった。

『……なんだったの？』

思わず発した声は少しかすれていた。

やはり貧血かもしれないと香子は思った。少し安静にした方がいいかもしれない。香子はずるずるとその場に座り込んだ。そして建造物の名残に寄りかかる。

そしてふと、夢を見ているのかもしれないと香子は思った。

そうだとしたらなんともリアルな夢だ。

そのままぼーっとしていると、風の音や、鳥が鳴いているようなチチチ……という音が聞こえてきた。

『のどかなあ……』

香子は中国でものんびり暮らしていた。しかも最後の頃は一人部屋にしていたし、こんな俗世を離れた状態に身を置きたいなんて思うほど疲れてはいなかった。

『あー、お母さんの作ったひじきが食べたいなあ……』

そんなことを呟いていたら、遠くから足音と複数の人が話しているような声が聞こえてきた。

香子とはつきに身を縮め、耳を澄ませた。

「……○×△か!？」

「……××○□……」

足音を聞く限り、複数の人間が香子のいる場所へ向かってきているようだ。話し声も大きい。

(何を言ってるんだろう……?)

聞いたことがあるような、ないような音は風に紛れてうまく聞き取れない。そうしているうちに

足音がだんだん近づいてきて、香子はどうしようかと焦った。

どう聞いても男性の声ばかりで香子にとって敵か味方かもわからない。けれどどこに隠れたらいいのかもわからず、とりあえず見つからないように更に身を縮めることしかできなかった。

(最悪な事態だけは勘弁してほしい……)

実は野盗の集団でした、とか。そこまで考えて香子は青ざめた。

(なんでもっと早く移動しなかったんだ私……!?)

いくら中国で四年過ごしたとはいっても、日本人特有の危機管理能力の低さは抜けていなかったらしい。そんなことをつらつらと考えている間に更に足音が近付いてきて――

「……○×!？」

「……△! ××!？」

身体を何日も洗っていないような特有の匂いがし、香子はあっさり見つかってしまった。

一 異世界転移して連れて行かれた先は皇都でした

ここにやってきた集団の、男のうちの一人が乱暴に香子の顔を上げさせる。

「○×……。△○×△△か？」

香子は内心パニックを起こしながらも、男たちが話す言葉に既視感を覚えた。

男たちは昔の農民のような格好をしていた。中国や日本の時代劇で見えるような、粗末な布で作られた服を着ている。

男たちはいぶかしげな顔をしていたが、どうも香子に敵意を持っている感じではなかった。話している言葉は明らかに日本語ではない。

(とりあえず聞いてみるしか……)

「すみません、ここはどこですか？」

普通こういう場面では英語が出てくるものなのかもしれないが、香子にとって外国語というところから中国語が出てくる。言い訳をすると彼らが話している音はアジア系だった。すると男たちは目を見張った。

「×○！ △○△××△○だ！」

なんだか知らないがひどく興奮しているらしい。他の誰かが香子の手を取って立たせ、ゆっくり

としやべった。

「アンタ、オラの言ってること、わかるか？」

なまりはひどかったが、それは明らかに中国語だった。

「はい、わかります！」

そう答えると男は明らかにほっとしたような顔をした。そして仲間たちに身振り手振りを交えて何やら説明しはじめた。

方言なのだろうと香子は思った。いくら耳を澄ましても聞きとれなかったからだ。香子は北京で中国語を勉強していた為、基本は標準語を習っていた。一応四年暮らしていたのでそれに北京の方言やなまりは少し入っているが、その発音は標準である。

しかし中国は広い。暮らしている間にいろいろなところを旅行したが、標準語を全く解さない人にも会ったし、その土地の言葉で話されると全くわからなかったりとさまざまだった。

かろうじて標準語をしゃべれる人がいたのは僥倖きやうしやうだったのか。

そうしているうちにどうやら話がついたのか、男たちに手招きされた。

「歩けるか？」

「はい」

気づかうような言葉に香子は頷く。

「じゃあ、行くべ」

促されて香子はバッグを抱え歩きだす。荷物を持ってくれるようなそぶりをされたがそれには首

を振った。

全財産が入っているのだ。いくら重くても人にゆだねるのは論外だった。

帰りの荷物が多いからと履物を運動靴にしたのは幸いだった。

香子はそのまま森の中を一時間近く歩かされた。

村のようなどころに着いた時、香子は情けなくもその場にへたりこんだ。

男たちが苦笑しているのがわかる。けれど香子は疲れていた。

わからない言葉、自分のペースでない歩み、そしてこの先のこと。

瓦屋根の小さな家々から人々が顔を覗かせている。一人の女性がおそろおそろ近寄ってきた。

「○×△？」

「○△」

彼女もまた粗末な布で作ったような衣服を着ていた。そして男たちに何事か話すと、へたりこんでいる香子に手を差し伸べた。

「ありがとう」

そう言ってへらりと笑い立ち上がると、女性は笑った。

「素敵な、色の、髪してる」

ゆっくりとなまりを含んだ標準語で話しかけられ、香子は首を傾げた。そして自分の髪を軽く掴む。そして納得した。

香子の髪は中国にいる間中、就職したら髪の色も自由にできないからと、ただひたすらに赤に染

めていた。香子の髪は胸につくぐらい長く、それをずっと赤に染めていた為非常に目立つ。染め続けていたせいか髪にはしっかり色が馴染んでおり、元からこのワインレッドの色だと言われても違和感がないぐらいだった。

「ありがとう」

「それ本物？ 偽物？」

「偽物です」

そう言って笑うと女性もまた笑った。

「よかった」

女性は安心したように言う、香子を家に招き入れた。

粗末な木の椅子と卓^{デイレ}があり、香子は座るよう促された。

「本当の色は？ 黒？」

そう聞かれて香子は首を傾げた。なんの話だろう。

「髪」

頭を指差して言われ、合点がいった。

「黒です」

（やけにこだわるな……）

どうもこの辺で様子がおかしいことに香子は気づいた。

「お湯どうぞ」

「ありがとう」

お茶を飲む習慣がないのだろうか。

湯のみに入っているお湯は透明とはいえず少し濁^{にご}っていた。けれど香子はためらわず口をつけた。煮沸^{しやうふつ}してあれば一応問題ないだろうと香子は思ったのだ。

少し飲みづらかったからきつと硬水なのだろう。思ったより香子は喉が渴^{かわ}いていたらしい。

香子が少しづつ湯をすすっていると、小屋の表が不意に騒^{さわ}がしくなった。

聞きなれない音と聞きなれた音が混在している。香子は耳を澄^{すみ}ました。

女性は「ちよつと待って」と香子に声をかけて立ち上がった。彼女が入口まで歩いていった時、入口にかかっていた布が払われた。

「わあ……」

思わず香子は声を上げた。

入ってきたのは中国古代の文官服を着た、ひどく綺麗な男性だった。

男性は香子を見ると一瞬はつとしたような顔をした。そしてすぐにその表情は柔和になった。

「あの方ですか？」

「はい」

男性はまず女性に声をかけた。どうやら香子に用があるらしい。

表情は柔らかいとその眼差しは厳しい。彼はゆったりとした動きで香子の側に立つ。

「初めまして、私は趙^{わたくし}文英^{ジャウエンイン}と申します。異なる世界からいらした同胞にお会いできて光栄です。

是非私と共にいらしてはいただけませんか」

彼は優雅にとんでもないことをたまった。

驚愕した香子の脳裏をいろんなものが駆け巡る。

（「異なる世界からいらした同胞」って今この人言った？ これは聞き間違いに違いない！）

趙と名乗った綺麗な男性はとても綺麗な中国語を話した。いわゆる「北京官話」と呼ばれる中国華北地方から東北地方に通用する標準語の発音である。現代中国語はこの「北京官話」を基礎に標準語と定めているが、ここでもそうなのかもしれない。

「すみません、先ほどあなたが言った『異なる世界』とはどういう意味でしょうか？」

とりあえず香子は聞いてみることにした。なんだかとても嫌な予感がする。

「そのままの意味です。貴女は異なる世界から我々が世界の神によって召喚されてきたのです」

（……………は？）

涼しげな面が告げたその科白^{せりふ}は、香子を固まらせるには十分だった。

その間も香子の頭の中でぐるぐるといろいろな考えが浮かんた。

（これは平行世界？ それとも俗にいう異世界トリップ？ しかも召喚されてきたとかつて何……………!?）

頭がくらくらしてくる。そうでなくても香子は慣れない道を一時間も歩かされて疲れていた。実際のところ考えないようにしていたのだ。それなのにこの趙という綺麗な男性はあっさりとそれを香子に告げた。

香子が脂汗を流しながら沈黙していると、再び趙が口を開いた。

「失礼ですが、その髪の色は元からのものでしょうか？」

「染めています」

即座に返答すると趙はほっとしたように笑った。

「元の髪色は黒、でしょうか？」

「はい」

香子は首を傾げた。そんなに黒であることが重要なのだろうか。

そういえば、と思い出す。

（「同胞」って言われたような……？）

香子は趙と同じ言葉を話している。つまり異なる世界から来てもルーツは同じ者、つまり中国人だと思われるのだろう。おそらく何か手違いがあって香子が召喚されたのだろうが、ここで日本人だというのはためらわれた。

（へたすると殺されるかもしれないし……）

それぐらいは香子でも思いつく。決して他の国の者だと知られるわけにはいかない。

「あの、私特別な能力とかないですけど、どうして召喚されたのでしょうか？」

そう聞くと趙の顔が一瞬陰ったように見えた。

「私にはわかりかねます。ですが召喚された方は皇城へお連れすることになっております。どうか是非私と共にいらしてください」

趙は丁寧^{ていねい}に拱手^{こうしゅ}する。

（答えてくれる気はなさそう……）

きつと趙は召喚の理由を知っているのだろうと香子は思った。

「ええと、ところでこの国の名前はなんなのでしょうか？」

気になったことをとりあえず聞いてみた。

「唐^{タウ}です。貴女様がいらした国名はなんのでしょうか？」

（唐……）

「現在は中華人民共和国と言います。略称は中国です」

「随分長い国名ですね」

「はい。長い歴史の中には唐という国名もありました」

そう香子が答えると趙は微笑んだ。

「お名前をお聞かせ願えますか？」

そう聞かれてやっと香子は名乗っていなかったことに気づいた。本名を名乗ろうとして考える。

（四文字の名前は多分少ないよね？）

新たに名前を考えるのも面倒なので名前を短くすることにした。

「私は白香^{バイシャウ}といいます」

香子の本名は白沢香子^{しらさわ}というが、中国では一般的に姓は一字、名は時代によって一字であったり二文字であったりする。姓名合わせて四文字以上という人は、いることはいるが少ない印象が

ある。香子はできるだけ疑われないよう予防線を張ったのだった。

「それでは白香様、参りましょう」

趙に促されて席を立つ。香子はいくともなんと答えてはいないが、ここでごねてもどうにもならないことはわかっていた。

(なるようになるか……)

そう考えて、香子はそつと嘆息した。

この国に関する基礎知識は移動中に教えてもらうことにして、香子は促されるままに馬車に乗った。

出発する時、村の人たちが馬車に向かって拝むようにしていたのが香子としては引っかけた。きつと向かいに座っている趙に対してなのだろうが、そうでない場合を考えるととても嫌な予感があった。

趙は秀麗な面に、にこやかな笑みをたたえて香子を眺めている。

「あのう……皇城というか、皇都までどれぐらいかかるのでしょうか？」

興ではなくて助かったが、道がアスファルトで舗装されているわけではないのでそれなりに揺れる。しかも急いでいるのか、かなりのスピードを出しているようだった。

「できるだけ早くお連れするように言われていますので、夜は宿をご用意するとしても二日と半日、というところでしょうか」

(二日半……)

香子は頭がくらくらした。一応街道ではあるからならされてはいるが、所詮土の道である。それこそ中国に初めて着いた年に車に乗った時と同じぐらい、いやそれ以上に馬車は揺れた。

(車酔いするんだよね……)

一応伝えておいた方がいいかもしれないと香子は思った。酔い止めの薬はないだろうが少しは気を遣ってくれる、と思いたい。

「すみません、車酔いする体質だということは伝えておきます」

そう告げると趙は心配そうな表情をした。

「かしこまりました。気分が悪くなるようでしたらいつでもおっしゃってください」

香子は眉を寄せた。初対面の人にそんな親切にされる理由がどうしても思いつかない。しかも相手は明らかに官吏で、香子は言ってしまうほどの平民だ。香子は別段目立った容姿はしていない。髪は赤いが染めているだけで、特別な能力があるわけでもない。中国語を話せることが特別といえばそうかもしれないが、四年も留学したのだからある程度習得していて当然ともいえるし、中国人だと思われているのだから中国語が話せるのは当たり前のことだ。

だからといってどういうことなのか聞いても趙は答えてくれないだろう。仕方なく香子は当たり障りのない質問をしていくことにした。

香子が倒れていた場所は石家荘せいかさうという街の外れにある神殿だったらしい。現在の皇都は北京にあり、建国から遷都せんとをくり返して現在は北京になっているそうだ。

唐の都は長安——現在の西安——ではないのかと香子が聞くとひどく驚かれた。最初の頃は確か

に長安が都であつたらしい。

異世界というよりやっぱり平行世界なのではないかと香子は思ったが、残念ながらこの国の周辺には日本も朝鮮も韓国も、その他もろもろのアジア諸国がほぼ存在していなかった。

(中国は確か十四か国と隣接していたはず……)

この国も聞くとかなりの広さがありそうである。そしてこの国が存在している大陸には全部で五カ国しかないと言う。その中でも一番面積が広く力を持っているのがこの国なのだと趙は誇らしげに語った。

もちろんこの世界には他にも大陸がいくつも存在し、一番近い大陸までは船で二カ月かかるという。

スケールの大きさに香子は頭がくらくらした。

「白香様は博学でいらっしゃるんですね」

現在の中国の歴史や政治・経済・貿易の状況などを聞かれるがままに答えたら、趙は感心したように言った。

「私は大学生でした。これぐらいは知っていて当然です」

そう答えながら香子は少し後ろめたいものを感じる。実をいうと中国のことばかり詳しくて母国である日本のことはほとんど知らなかった。

趙が香子を中国人だと思っているから疑われないのかもしれないが、それはそれで香子は複雑だった。

移動は明るいうちに行い、日が陰ると居心地のいい宿に泊まった。しかも何人も手伝いと称して侍女が付き、上にも下にもおかしい扱いをされている。

(巫女とか、人柱とかだったら嫌だなあ……)

食事は肉類は少なく野菜がメインで食べやすくおいしかったし、風呂といえど大きな盥にお湯を張って世話をされる。趙は優男という風情だが実は石家荘の長官の副官だとも聞いた。副官は雑務だけでなく護衛も兼ねている、いわゆるなんでも屋のようなものだ。趙は言っていたが、そんな簡単に説明できるものではないことぐらい香子にだってわかる。

(嫌な予感が当たりませんよーに)

翌日は皇都に着くという夜、床に横たわり、香子は眠りにつくまで必死にそう願った。

朝早くに一行は宿を出発した。三日目の朝である。今日はおそらく夕方になる前に皇城に着くだろうとのことだった。

「お疲れのところたいへん恐縮ですが、これからの予定をお伝えします」

そう前置きして趙は淡々とスケジュールを香子に伝えた。

昼食は皇都の飯館^{レストラン}で取り、その後召喚された時と同じ服を身に着ける。

皇城に着いたらまず皇帝に目通りする。いくつか質問されることがあるかもしれないが答えられる範囲で答えればいい。部屋に案内され着替えた後、晩餐会に出席する。

聞いているだけで香子は頭が痛くなった。

(長い一日になりそうっつか、なんで皇帝……)

「晩餐会にはこの国の守護である四神がいっしょいます。白香様とお言葉を交わされることなるでしょう。とても美しい方々ですが、できるだけ心安らかにお過ごしくださいますよう」

(四神?)

聞き慣れない単語に香子は首を傾げた。

「四神ってなんですか?」

自分に全く関わらないものならいいが言葉を交わすと言われた。そうなんだーと流しているものではないだろう。

「四神はこの国の守護をされている神々です。東を青龍様、南を朱雀様、西を白虎様、北を玄武様が治めていらっしゃいます」

(……は……?)

香子の頭の中で青い龍、赤い鳥、白い虎と黒い亀がぐるぐる廻った。

(なんで神様と会話なんか……)

とても嫌な予感に背中を冷汗が伝う。

「あのう……神様と言葉を交わすなんてそんな恐れ多いことを、何故私がするんですか……?」

自分がどうなるのか聞きたいと香子は切実に思う。趙はにっこりした。

「それはお会いすればおのずとわかることでございます。詳細は私にもわかりかねます」

(嘘だー……!! 絶対この人私がどうなるか知ってる……!!)

香子は叫びたくなった。

今すぐこの馬車から下りて逃げ出したい。けれど荷物は預けさせられてしまったので手元にはない。香子にできるのは会話ぐらいのものであり、更に赤く長い髪は目立つ。

(やっぱり帰る前に黒に染め替えるんだった……!)

せっかくの赤い髪、せめてぎりぎりまで楽しみたいと思ったのは間違いだったのか。

香子は暗澹^{あんたん}たる気持ちになった。

もちろん逃げることなどできようはずもない。一度停車した後再び走り出した馬車は、何故か揺れが少なくなった。

疑問が顔に出ていたのか趙が説明してくれた。

「皇都に入りました。皇都は石畳が整備されておりますので揺れは少ないです」

とうとう皇都である北京に着いたらしい。

(こういうの、とんぼ返りっていうのかしら)

「外を見ても?」

「どうぞ」

香子は趙の言葉に甘えて馬車の窓にかかっている布を払った。馬車の側には護衛と思しき人たちが馬に乗っているのが見えた。

下を見ると、なるほど白っぽい石畳だった。そのまま視線を空に向ける。

(あー、綺麗だな……)

香子がいいた北京の空は白っぽかった。経済成長期だからなのか、あまり空気はよくなかった。けれどこの国はそうではないらしい。ところどころ雲が浮かんでいる空はどこまでも青く澄んでいた。

自分の故郷である東京もここまで綺麗な空ではなかったと香子は思う。

(ああ本当に……)

香子はやっと実感する。

(ここは私の知っている場所ではないんだ……)

一度旅行に行った内モンゴルの空も綺麗だった。日本だって都市部から離れば空気が澄んでいるのだろう。

いつまでも空を見上げている香子を不審に思ったのか、護衛の一人が声をかけてきた。

「何か気になることでも？」

「いいえ、何も……」

香子は布を戻し馬車の中に頭を引っ込めた。

「何か面白いものは見られましたか？」

趙の優しい声音がとてつらい。香子は泣きそうになるのをどうにかこらえた。

「空が……とても、とても綺麗だったんです……」

ただ、それだけ。

そう、ただそれだけのこと。

「そうですか」

けれど趙は何も聞かないでくれた。

しばらく香子はそのままぼうつとしていた。やがて昼食を摂る予定の飯館に着いたらしい。

「お食事は召し上がりますか？」

趙の優しい声に香子は素直に頷いた。

沈んでも腹が減っては戦はできぬ。そうでなくてもこれからがたいへんそうだった。

香子は趙に促されるまま飯館に入った。

皇都の飯館というだけあって、今まで食べたものよりもメニューはあかめけていた。

お皿もびかびかに磨かれているし、料理と共にお皿に載っている飾りも見事だ。野菜の飾り切りが素晴らしくて食べていいのか悩むほどである。もちろん店内も広く清潔だった。

給仕のタイミングもばっちりで、何故か菜單もまず香子に渡された。メニュー表

香子は学生だったのであまりこういう豪華な店とは縁がなかった。その為菜單を見ても大体字面でこういう料理なのかと想像するだけでよくわからない。ここはやはり趙に頼るべきだろうと香子は菜單を彼に渡した。

「お気に召しませんでしたか？」

と聞かれて違うと答える。

「私は学生だったのでこんな高そうな店で食事をしたことはありません。菜單を見てもどんな料理なのか想像がつかないのでお任せします」

そう言うところにはつこりした。

「お嫌いな物はありますか？」

「肉や内臓の類は苦手です。できれば野菜、鶏、魚介類から選んでいただけると助かります」

「かしこまりました」

そうして選んでもらった料理はおいしかった。お茶は高級な店らしく菊花茶だったのが少々残念だと思ったぐらいだ。香子は庶民の店ばかり行っていたので、お茶というと茉莉花茶ジャスミンティーが普通であった。驚いたことに通された個室には着替えの為の小部屋までついていた。食べ終えた後そこで元の服に着替える。得体のしれない服だろうに丁寧に洗濯までされていた。

長袖のTシャツにジーンズ。セーターやオーバーは飛行機の中で脱いでしまっていた。たったそれだけの格好なのに何故か寒さは感じない。

（私が帰国した時は冬だったんだけど……？）

「今更なのですが、現在の季節は……？」

「春です。その格好ではいささか寒うございませんか？」

「いえ、今のところは大丈夫です」

冬から春に移動？ 香子は頭を悩ませながらも再び促されるまま馬車に乗った。

皇城に着く前にできるだけ話を聞こうと思っていたが、朝早かったこともあって疲れていたらしい。香子はすぐにうとうとと眠ってしまった。

「……白香様、白香様」

何度も声をかけられてやっと香子の意識は浮上した。目を開けて辺りを見回すと随分と暗くなっている。いつのまにか自分が眠っていたことに気づき、香子はぼっと身体を起こした。

「あの、すみませんでした……」

趙に謝ると、とんでもないと微笑まれる。

「移動で疲れていらつしやるのですから起こすのが申し訳ないぐらいです。ですがそろそろ皇城に着きますので」

そう言われてとうとうか、と香子は武者震いした。泣いても笑ってもここで自分の立ち位置がわかるはずである。

そうしているうちに馬車が何度か止まり、そろそろ着いたのかなと思ったところで「着きました」と趙が言った。

馬車の扉が外側から開かれ、趙に手を取られて馬車を下りようとした時、目の前にいかにも官吏という格好をした人々が平伏しているのが見えた。

（な、何……？）

「異世界からいらした客人にご挨拶に参りました。どうぞこちらへ」

その中でも位の高そうな格好をしたおじさんが前に出てきて促される。

（これは一体なんのどつきカメラですか……？）

趙を見ると軽く頷いた。どうやらこのおじさんについていった方がいらしい。

おじさんの後についていくとその後に趙、それから先ほど待っていたらしい人々がついてくる気

配を感じた。あまりにも慣れないことに、香子は背中をだらだらと冷汗が流れるのを感じた。

広い石畳を歩き、白い石で造られた長い階段を上ると、その先にあるのが謁見室らしかった。

(紫禁城——現在の故宮——と造りは似ているけどどうなんだろう?)

現実逃避したくて、どうでもいいことをつい香子は考えてしまう。

謁見室の手前の階段を上り広い室内に足を踏み入れると、沢山の人の目が一斉に香子に向けられた。

(……うつ……)

見世物パンダになる予感是一直にいたが、これほど注目を浴びたのは初めてである。香子がひるみそうになっている間もおじさんはどんどん足を進め、おそらく玉座だろうと思うところから十メートルぐらい離れた場所で足を止めた。

「皇帝陛下がまもなくいらつしやいます。それまでこちらでしばらくお待ちください」

おじさんはそう言つて脇に避け、香子は後ろに控えている趙と真ん中の位置で取り残された。

(この場合ただ突つ立つてもいいわけ……?)

いくらなんでもここで座り込むわけにはいかないだろう。そんなことを考えていると――

「皇帝陛下のおなーりー!」

ボワンボワン! という銅鑼どらの音と共に朗々とした声が室内に響いた。

向かつて右の内側の扉から、黒い豪華な衣装をまとった男性が現れた。そしてまっすぐ玉座に向かいその前に立つ。お付きの者たちがさつと定位置であらう場所に立つと、今まで物言わず突つ立っ

ていた人々が拱手して合唱した。

「皇上、万歳万歳万々歳!!」

まるで地が割れんばかりの大声に香子は耳を塞ぎたくなつた。

皇帝陛下万歳! と言つていた。あの男性はこの国の皇帝らしい。

「平身」

皇帝が低い声を発する。

「謝皇上!」

人々は皇帝の言葉に礼を言つと、再び元の格好に戻つた。

その様子を、香子はただ茫然と見ていることしかできなかった。

(わー、中国の時代劇が目の前で……)

あまりの迫力にそんなことしか思い浮かばない。

じろじろ見るのは失礼だろうが、思わず目がいつてしまう。

皇帝は黒い冠を被っており、黒い光沢のある長袍をまとっている。その下には黄色い袍を着ているのがわかる。どちらも見事な刺繍が施されているのが見えるが、遠目ではどんな模様なのかかわらないのが香子にとって悩ましかった。

中国の皇帝というのは冕冠——頭の前後にすだれを垂らしたような帽子——を被っているものと香子は思っていたがどうやら違つらしい。それともやはり特別な時にしか被らない物なのかもしれないとも思い直した。

香子はその後促され、用意された部屋に案内された。

部屋で侍女たちにお茶を淹れてもらいほっと一息をつく。

「たいへん申し訳ありませんでした！」

すると、ずつとうなだれていた趙がいきなり目の前で平伏した。

「あー、いえ、いいですよ……」

趙に謝られてもしかたがない。それに、何がどうしてそんなことになっているのかはわからないが香子に拒否権はないのだろう。

「それよりも、もう少し詳しく説明してくれませんか？」

ある意味人柱的な意味合いもあるのだろうか、いきなり見知らぬところに連れて来られて見ず知らずの相手に嫁げとは随分と乱暴な話である。

趙がおそろおそろ顔を上げる。

「私はそれほど詳しいことは存じませんが……」

そう前述して、趙は四神と花嫁について簡単に説明した。

この国を守護する四神の為に、何百年かに一度異世界から花嫁が召喚されてくること。

四神の子どもが産めるのは、異世界から召喚された花嫁ただ一人だということ。

その為、花嫁召喚のお告げがあると国が率先して保護をするというのである。

(專業主婦が夢ではあったけど、まさかこんなことになるなんて……)

香子は頭が痛くなった。

今夜の晩餐会にはその四神も来るという。香子はたまらず大きなため息をついた。

正直諦めるしかないのだろうが、四神は実際この異世界からの花嫁に対してどう思っているのだろうかと香子は考えてしまう。

「知っている範囲でかまわないので質問に答えてもらっても？」

「はい、なんなりと」

趙文英は本当に申し訳ないと思っているのか、香子の頼みに従順だった。頭が混乱している状態なので、聞き洩らしがないように何を質問するか考え考え香子は言葉を紡ぐ。

「私を召喚したのは四神のですか？」

「いいえ。召喚する力を持つのは天皇テイエンホワンのみと伝えられています」

ここで言う天皇が日本の天皇でないことは香子にもわかった。

「天皇とは……確か神話上の帝王のことですよ？」

「さすが白香様、お詳しくていらっしゃる。ご存じの通り三皇五帝は伝説上の存在とされておりますが、三皇は神、五帝は聖人を指します。聖人はすでにこの世になく、三皇は天に昇りました。人の前に姿を現すことはなくなりましたが、四神を通してこの国を見守っていらっしゃいます」

この世界に来てから香子の頭は休まる暇がない。

(三皇まで存在してるなんて……)

三皇——天皇・地皇・人皇——と言われる存在は中国ではあくまで伝説上の存在であることが知られているが、五帝には諸説があり、最後の舜しゅんから禪譲された禹うが夏王朝を建てたと言われている。

「あの……ではこちらの世界では夏王朝の遺跡などは発見されているんですか？」

夏王朝も伝説上の王朝と言われている。それは遺跡が発見されていないからだ。

「考古学のことは存じませんが、夏王朝は陽城ヤンチェンに建国したとされていますね」

それは『史記』——司馬遷の書いた歴史書——にも記載があったから香子も知っている。その陽城という地名がどこに当たるのかわからない。

「陽城の場所はどこなのでしょう？」

だんだん話が脱線しているのはわかっていたが、中国歴史オタクである香子にとって夏王朝の実在は大きな問題だった。

趙は戸惑いながら、「どの辺りとお答えすれば？」と応える。

香子は興奮をどうにか抑えながら彼の話を聞き、結果的に陽城は少林寺の近くに存在したというところまで聞くことができた。

香子が内心とても喜んでいる時、晩餐会の為の準備をと侍女たちが現れた。

結局四神について大したことは聞けないまま趙は部屋を辞してしまった。香子はまだ夏王朝の都の場所について思いをさせていたせいか、侍女たちに促されるままに入浴し、身体を磨かれ、彼女たちの好きなように着飾られた。

「なんて見事な赤い髪でしょう」

「朱雀様とどちらがより赤いのでしょうかね」

だから香子は侍女たちの褒めそやす声にも生返事をしただけであつた。けれどそれでも彼女たち

は満足したらしい。

やがて部屋の表から声がかかり、侍女が扉を開けに行った。

予想に反して、香子を迎えにきたのは馬車から下りた際に先導してくれたおじさんだった。

「晩餐会の準備が整いましたのでお迎えにあがりました」

そう言われて香子は機械的に立ち上がる。長く赤い髪は結い上げられ、簪かんざしをいくつも挿されて重い。昔の人はよくこんなに重い物を頭に挿して文句を言わなかったなと香子はぼんやり思った。香子がまどつている衣装は髪の色が映えるような色合いのものだった。黒地にところどころ赤の入った豪華な衣装である。その上から白い薄絹がかけられた。

晩餐会の会場は先ほどの謁見したところとはまた違う場所らしい。

何度も角を曲がり自分では元の部屋に帰れないかと香子が思った頃、おじさんは足を止めた。

「白香様はこちらからお入りください。中に入られましたらお席に案内する者が控えております」

「ありがとうございます」

礼を言うといひどく恐縮された。香子は首を傾げながら言われた通りに扉の前に立った。

「白香様が到着されました」

おじさんが朗々とした声で扉の向こうに声をかける。するとその扉は内側にゆつくりと開いた。香子はぐくりと唾を飲み込む。ここで自分の運命が決まるのだ。

二 四神とご対面です！

晩餐会といってもただの食事会と気楽に考えてはいけない。それは皇帝によって催されるものである。

香子の大方の予想通り、扉の向こうは大広間だった。直線距離にある台の上に玉座が見え、その一段下の横に一回り小さな椅子が置かれている。椅子といっても豪華なものだからあれはきつと皇后の席なのだろう。

促されるままに香子が扉の内側に足を踏み入れると、宦官かんがんと思しき男性に席を案内された。

段差の一番下、皇后の席の近くに置かれた椅子の前に立ち、正面を向く。

バイシエンシエンシエンシエンシエンシエンシエン
「白香娘娘、千歳千歳千千歳！」

広間の脇に控えていた人々が合唱した。びっくりして香子はその場で立ち竦む。

これは皇帝の家族やそれに見合うだけの地位を持つ者に対する挨拶と言っても過言ではない。何故香子はそのように挨拶されるのかわからなくて戸惑うことしかできなかった。

いつのまにか脇に控えていた先ほどの男性が、「もうよい、とおっしゃってください」と低い声で香子に伝えた。

よい
「……免了」

ハハハハハハ
「謝娘娘！」

人々は香子に礼を言うのと、拱手を解いた。

皇帝は万歳、であり、その臣下に当たる家族やそれに連なる者には千歳という言い方をする。

香子はまた頭痛がしそうだった。すると音楽が鳴り、反対側の扉から皇帝が入ってきた。その後ろには着飾った女性の姿がある。

「皇上、万歳万歳万々歳！」

というお決まりの挨拶があり、その後で「皇后娘娘、千歳千歳千千歳！」という挨拶があった。やはり皇帝の後ろから伴ってきた女性は皇后だったらしい。

一通りの挨拶が済むと「どうぞおかけになつてください」と男性に言われ、香子は椅子に腰かけた。(そういえば四神ってどこにいるんだろう……?)

香子が視線を巡らすと、広間を挟んだ向かいに派手な髪色をした男性たちの姿が目に入った。

「此度は四神の花嫁を迎え、誠にめでたいことである。今宵は無礼講だ。好きに過ごすがよい」

皇帝の言葉に場内が湧く。けれどやはり節度というものはあるらしく、香子よりも下座に並んでいる女性たちの方にも誰も訪ねていく気配はなかった。そこでやっと香子はその女性たちが後宮にいる妃だということに気付いた。

皇帝の寵を競い合うように着飾った女性たちは皇帝を熱い眼差しで見つめている。中にはその横に並ぶ皇后を睨んでいる者もいた。

(こ、こわいっ！ 綺麗だけどこわすぎるっ！)

香子が目の前に置かれた料理に手をつける余裕もなく引いていると、いきなり目の前に赤い長髪的美丈夫が現れた。髪は少しウェーブがかっている。

「そなたが異世界から来たという娘か。髪を染めているようだが、赤が好きなのか？」
耳に心地よいテノールで話しかけられ、香子は面食らった。

「は、はい。赤は好きです……」

そう答えると美丈夫は嬉しそうに微笑んだ。

なんでもこんな格好いい男性が香子に声をかけてくるのだろう。心当たりがなくて戸惑っていると後ろからこう教えられた。

「朱雀様にございます」

「えええっ!」

「こちらにいます。みなに紹介しよう」

香子が驚いている間に美丈夫——朱雀は香子を軽々と抱き上げると、飛ぶように広間の向かいの一角へと向かった。

「わぁ……」

みなが惚れ惚れするような美丈夫がそこに三人いた。緑の髪をしているのは青龍、白い髪は白虎、黒い髪はおそらく玄武だろうと香子は思った。

(竜とか、鳥とか、虎とか、亀の姿で来られなくてよかった……)

ちよっとピントのずれたことを考えてぼっとしていると、朱雀が頬に口づけてきた。

「なっ、なっ、なにっ!」

びっくりして朱雀の腕から下りようとしたが、彼はにこにこしているだけだった。

「名はなんという?」

さすが神様、見た目は人に似せているが香子の戸惑いをまるで気にしていない。

ここで香子は一瞬逡巡した。神様相手に嘘が通用するだろうか。けれど周りの意識は全てこの一角に向けられているような気がして、やはり香子は最初に名乗った通りの名を告げることにした。

「白香と申します」

そう言うと朱雀の目が楽しそうに丸くなった。

「ふむ?」

「……そうか」

「……………」

「白香、これからよろしく頼む」

四神四様の反応に冷汗をかく。ちなみに右から朱雀、白虎、青龍、玄武である。

(うわーん、やっぱりこの人たちわかってるよ!)

香子の内心の混乱っぷりをよそに、朱雀は機嫌よさそうに香子を膝に乗せて軽く抱きしめた。

「白香よ、何か食べるか?」

と声をかけられる。朱雀の科白に、そういえば神様って何を食べるのだろうかとお膳を見ると、肉や魚、野菜などの料理が所狭しと並べられていた。

一応気を遣ってなのか、朱雀の前に鳥料理はないようである。

「魚と野菜が食べたいです」

香子は素直に答えた。

「肉は食べぬのか？」

すると横から白虎が低い声で尋ねてきた。北京では鶏肉がおいしかったがそれを朱雀の膝の上で答えていいものだろうかと香子は悩んだ。

「牛は食べますが、内臓類は苦手ですし、豚は脂身が多いのであまり好きではありません」

「ふむ……」

白虎は満足したのか声を漏らすと、目の前の肉の塊に手をつけはじめた。

（つてそれ、アヒルの丸焼きじゃ!?）

「鳥の肉は食べぬのか？」

頭上から他意なく聞かれた。それを聞いて白虎の隣に悠然と腰かけている玄武が低く笑った。

「白香はそなたに気を遣っているのだろう。察してやれ」

朱雀は玄武の言葉に少し考えるような表情をし、やっと気付いたようだった。

「ああ！ 鳥類だから我に気を使ったのか？ 我は家畜とは違う故そのような気遣いは無用だ」

そう言われて香子はほっとした。

「それにしても……」

頭上にあつたはずの朱雀の顔が下りてきて目の前に迫り、香子の顔を覗き込んだ。

（面食いなんだからそれ以上その素敵な顔を近づけないでえええええ！）

この神様たちはあまりにも香子の好みの顔をしている。この顔で迫られたらどんな性格だろうと例え子どもを百人産めとか無体なことを言われても頷いてしまいそうで香子は嫌だと思った。

「我の為に鶏肉を好きだと言うのを躊躇するとは、そなたは心優しいのだな……」

香子が心の中でそれは違うから！ とツツコむ前に朱雀の顔が近付いてきて……

「んっ、んんん~~~~っ!？」

衆人環視の中で香子は唇を奪われていた。

（なんでなんでなんで~~~~~~~~っ!？）

香子は朱雀から逃げようとしたが、その腕はがっちり彼女を抱きしめて離さない。

香子が、なんで？ どうして？ とパニックを起こしている間も、朱雀の舌は香子の舌を絡め取

り好きなように吸っていた。

香子は涙目になった。するとすぐ近くから大きなため息が聞こえた。

「朱雀、白香は恥ずかしがつておるようだ。いくら見・せ・な・い・よ・う・に・し・て・い・る・と・は・い・え、やりすぎだ」
穏やかな玄武の声が朱雀をいさめた。

朱雀は名残惜しそうに香子から唇を離れた。香子はあまりのことにぐったりと朱雀の胸にもたれることしかできない。文句を言いたくてたまらないが、今は息を落ち着かせるのが先だった。

「……なんで……」

咄くと再びきつく抱きしめられた。

「そなたが愛らしくてつい耐えられなくなってしまった。許しておくれ」
(ああもうそんな甘い声で囁かれたら頷くことしかできないじゃないっ！)

朱雀の声は甘いテノール。玄武の声はバリトンで、どちらも香子の好みだった。

「あの……せめて他の人のいるところではしないでください……」

「人には見せないようにしていてもか？」

その科白が少し引つかかったが、香子は頷いた。

「朱雀兄、おめでとうございます。これで次代は約束されましたな」

白虎が嬉しそうに言う。しかし朱雀はその向こうにいる玄武に視線を向けた。

「私もそうだがそれよりも玄武兄の方が先であろう。愛しいそなたを共有しなければならないのはつらいがこらえてほしい」

朱雀に抱きしめられながら香子の頭の中は「？」でいっぱいだった。

(次代？ 玄武様の方が先？ 共有？ いったい何……？)

そんな香子の様子が青龍はフンと鼻を鳴らした。

「……どうやら人間たちはその娘にあまり説明をしていないようですが」

澄んだ水を思わせる透き通るような声に棘が含まれているのを、香子は正確に聞きとった。

けれどそれにむつとするには香子はすでに疲れすぎていた。投げやりな気持ちになって朱雀の胸に頬を擦りよせる。

朱雀はそんな香子に微笑んだ。

「疲れたか？」

そう優しく尋ねる声に、当たり前だと香子と思う。

いくら中国語が堪能であつてもずっと使い続けるのは疲れるし、更に様々な問題がのしかかっている。疑問は沢山あるが今日はもう尋ねる気力もない。

「白香、少しでも食べた方がいい。身体がもたぬぞ」

玄武に優しく声をかけられて少しだけ気分が浮上した。身を乗り出して朱雀の前に置かれた料理を改めて眺める。

「何が食べたい？ 食べさせてやろう」

朱雀が嬉しそうに声をかけてくる。また見えない疲れが肩にのしかかってきた。

「自分で食べます……」

ほっとけばあーんと餌付けされそうな気がして、香子は箸を受け取った。リーチの差で食器まで手が届かないので、結局皿を手繰り寄せてもらうことにはなってしまったが。

「その野菜料理をお願いします」

朱雀は嬉しそうに香子の世話を焼く。隣の白虎も「これも食べるか？」などと自分の前に置かれた皿を示してくれたりした。白虎の膳は肉類がほとんどだった。さもありなんと香子と思う。

(虎だもんね……)

白虎の向こうに腰かけている玄武の膳は野菜類が多かった。興味深そうに見ていると玄武は柔らかに微笑んで皿をいくつか回してくれた。

なんだか雰囲気か孫にかまうおじいちゃんのような感じである。

青龍はどうも香子にいい感情を持つていないようなので気にしないことにした。

(気が合わない人もいるよね、たぶん)

そうして甲斐甲斐しく世話をされている間に香子はおなかいっぱいになった。目はまだ食べたがっているのだが満腹である。

「腹は膨れたか？」

くすくす笑いながら朱雀に聞かれ、香子は頷いた。

「おいしかったです……」

「それはよかった。あとで伝えるように言っておこう」

そういえば、と香子は思い出す。自分の席の前にもお膳があつたはずである。

あちらの膳には全く手をつけないままこちらに連れてこられてしまったのだった。

(もったいないことしたな……)

よその膳から食べないでまず自分の膳から食べればよかったと香子と思う。

貧乏性と言われようがなんだろうが、食べ物を残す、という考え方が香子にはない。

中国では人をもてなす時は食べきれない量を出す。それは飯館などでもてなされる場合も同様だ。おかげで何度ももつたいないと身悶えたことか。徐々にそれも変わってきているとは聞いていたが、香子はよくわからない。

留学中、持ち帰れる分はできるだけ持ち帰って寮で食べたりしていたが、ここでそんなことはで

きないだろう。

香子は嘆息した。それに朱雀が気づく。

「どうしたのだ？」

「あー……残した料理がもつたいないなーって思つて……」

それに朱雀は笑った。

「残れば下男や下女に下げ渡されるだろう。そなたが気に病む必要はない」

「それならいいんですけど……」

食べ物の元は命なのだから、できるだけ無駄にはしたくないと香子と思う。

「そんなに食べ物に困るところから来たのか」

横から再び透き通るような声がした。おなかがいっぱいになって余裕が生まれたせいか香子はむつとする。

「私自身は困りませんでした。元の世界には飲み水にすら困る人もいました。この国にだつて食べ物に困る人々はいるはずですよ」

青龍をまつすぐ見据えて言う。彼は眉を寄せた。

「あつはつはつはつはつ！ 青龍、そなたの負けだ。いかげん絡むのはやめよ」

豪快に笑つたのは白虎だった。

「青龍は我らのうちでは一番若い。そなたにどう接したらいいのかわからないのだ、大目に見てやつてくれ」

頭上から朱雀がなだめるように言う。

（若いったっていくらなんでも私よりは年上でしょうに……）

それとも見た目にも影響されるのだろうか。パッと見る限りはみな二十歳前後の青年の姿をしている。しかし接し方がわからないという感じではない。青龍は明らかに香子を厭（いと）っているようだった。ただ香子も全ての人に好かれたいなどと大それたことは考えていないので、ほうっておくことにした。

さて少し余裕ができた為、ようやく疑問が少しずつ湧いてきた。おなかに血がいつている状態なので思考が鈍くなっているが、このまますぐに寝たくはない。

「あのー……全然知識がないのでいろいろ教えてくださいね？」

香子がそう言うのと、目を向けた朱雀、白虎、玄武は笑みを浮かべて頷いてくれた。

とはいえ何から尋ねたらいいのか香子もわからない。

趙はどこまで話してくれただろうか。香子は疲れた頭を動かして部屋での会話を思い出した。

（ああそうだ、天皇が私を召喚したんだっけ……）

そこで話を脱線させてしまったのだ。

「すみません、貴方がたは天皇と会うことはできますか？」

そう聞くと朱雀は不思議そうな顔をした。

「天皇がどのような存在か、そなたは知っているのか？」

「広義としての存在であれば。私のいた世界では神話伝説上の人物の一人と言われていました」

中国の歴史に関係する事柄を話す時の香子の目は輝いている。その瞳に朱雀は一瞬目を奪われた。「ふむ。我らが会えるかどうかと聞かれれば答えは否だ。だが言葉を届けることはできるし、それが聞き入れられることはある」

「質問はできませんか？」

「してみようと思ったことがないな。何を聞きたいのだ？」

朱雀以外の三柱も不思議そうな様子で香子を見ている。

自分より上位の神に質問をするということ自体ナンセンスだということは香子の想像に難くない。だが基本香子は無宗教だし、神の概念は日本の八百万の神という身近なものである。

「何故わざわざ異世界から嫁取りをする必要があるのかがわからないんです。どうしてこの世界の存在であるはずの四神は異世界から呼ばれた女性としか子を成せないのでしょうか？」

「召喚されたそなたが疑問に思うのは当然だ。しかし残念ながらそれをおかしいという思考が我々にはない。だが尋ねてみることは可能だろう。答えがいただけるかどうかは不明だが……」

朱雀の答えに香子は満足した。天皇がもしこの世界の最上位の神であるなら、余計な思考を四神に与えなかったということは理解できる。

「それで十分です。それから根本的な問題なのですが、私は四神全員と結婚することになるのですか？」

これはとても大事な問題である。

香子にいくばくかの好意を持っている朱雀、白虎、玄武とは少し考えられるが、現時点で青龍に

嫁げと言われるのは香子は嫌だった。朱雀が口を開く。

「もちろんそなたは我ら全員の花嫁だが、現時点では玄武兄か我の元に身を寄せてほしい」

「それは何故ですか？」

白虎が驚いたような表情をした。そしてすまなそうな顔で香子の頭を撫でる。

（なんですかその可哀想な子を見るような目は？）

香子は何も知らないのだから仕方ないだろう。

「ここまで何も知らせていないのは人間たちの怠慢ではないのか？」

白虎が眉を顰めて唸るように言った。その声に香子は背筋を冷汗が流れるのを感じた。

（うわー、やっぱり虎だよー、こわいよー）

だがここで責任を追及するとしたら、おそらく自分の世話をしてくれた趙が罰せられることになるだろう。それはさすがに気の毒だと香子は思う。

「下手にいろいろ教えて逃げられたりしないようにじゃないですか。私が勝手に逃げてどこかで野たれ死んだりしたら困るでしょう？」

フォローにも何もならないかもしれないが、ぎりぎりまで何も知らされなかった理由はこれぐらいしか思いつかない。

そう言う玄武がフツと笑った。

「そうかもしれないな。時間はたつぷりある。追々知っていけばよいだろう」

穏やかにバリトンが告げる。やっぱりいい声だ、と香子は改めて思った。

「しかしそれでは！」

いきなり澄んだ音が鋭い声を発する。それに香子はびくつとした。

「控えよ、青龍。玄武兄がいいと言うのだ。そなたが気にすることではない」

それを朱雀がいさめる。

何がどうなっているのか香子にはさっぱりわからない。首を傾げていると白虎が苦笑した。

「我々に次代が必要なのは聞いているか？」

「はい。そこまではなんとなく……」

その後白虎は簡潔に自分たちと香子の立場について説明してくれた。

曰く、四神は約千年毎に代替わりをする。その代替わりには次代を異世界からの花嫁に産んでもらうしかない。

しかし現状玄武はすでに千歳を迎えているというのに次代がいらない。その為香子に早急に産んでもらいたい。

だが次代の教育には眷族が不可欠である。その眷族たちも玄武は長い間花嫁に産んでもらっていないので、人間との混血が進み寿命が短くなっていて次代の教育には向かない。

なのでまずは眷族を香子に産んでもらい、その眷属が育ってから次代を産んでもらいたいという。香子はまた頭がくらくらしてきた。

（いったい……私は何人子どもを産めばいいの……？）

しかも朱雀は、先ほど玄武か自分に身を寄せてくれと言っていたような気がする。

白虎の話は香子の許容量をはるかに超えていた。

「すみません、ちょっと話を整理させてください」

まず眷族というのがわからない。玄武が千歳ということは他の三柱の歳は？ と考えてしまう。

「えーと、玄武様が千歳ということはみなさんおいくつなんですか？」

「我が約七五〇年、白虎が約五百年、青龍が約一五〇年生きているな」

それについては朱雀が答えてくれた。

（ということは……やっぱり玄武様と朱雀様の次代が今は必要なのね）

「あと、眷族、というのはなんでしょう？」

隣に腰かけている白虎が少し考えるような表情をした。

「どう説明したものか……」

「眷族というのは我ら四神に仕える一族のことだ。眷族が多ければ多いほど領地は潤い安定するようになっていく」

（うーん……ようは領主に仕える部下みたいな感じ？ んで同じ神様の一族だから数が多い方がいいのかな？）

うまく掴めないがそんなものだろうと香子は勝手に解釈する。

他にも大事なことを聞き忘れているかもしれないが、すでに香子の頭はパンクしていた。もうこれ以上は詰め込めないと思った頃――

「四神と白香娘娘は随分と交流を深められたご様子、まことにめでたきことである。どうか心安ら

かに滞在していただきたい」

すっかり存在を忘れていた皇帝の声がして、香子は声のした方向に目を向けた。

（白香娘娘、ね……）

四神の前ではさすがに小娘というのは憚^{はげ}られたらしい。

「朕^{ちん}は明日の公務に障る故先に退室させてもらうが、四神はごゆるりとなされよ。ご退室の際は四神宮に案内させていただきます」

広間中に届くような朗々と響く声で皇帝はそう言うと、さっそうと席を立った。それに慌てたように皇后が付き従う。確かに自分だけ残されても困るだろうと香子も思う。

皇帝が退室した後、四神はともかく他の者たちはどうしたらいいかわからないようだった。四神の手前そそくさと消えることもできなくて困っているように見える。広間の真ん中では相変わらず余興の踊りのようなものが催されてはいるが、座は一気に白けたものになった。

（逃げたな……）

お茶をのんびりと飲みながら香子は思う。

「そういえばこちらにはどれぐらい滞在されるのですか？」

ちよつと気になって背後の朱雀に聞いてみる。おそらく四神が皇城を去る時は、香子も四神の誰かに付き従っていくことになるのだろう。

（せめて一カ月ぐらい猶予があるといいなあ）

明日にはもう領地に戻る、とかはさすがに勘弁してほしい。まだ香子は何も知らないのだ。

「ここには一年いることになっている。もちろん、そなたが相手を決めてくれればすぐにでも戻るが……」

朱雀に顔を覗きこまれるようにして言われ、香子はぶんぶんと首を振った。この声もこの顔も非常に心臓に悪い。

「そ、そんなに簡単に決められません！」

慌てて答えると朱雀はクツクツと笑った。どうやらからかわれたらしい。

さすがにむっとしたが、また澄んだ声が出た。

「できるだけ早く決めてもらいたいものだ。我にはほかにせねばならぬことがある」

そこまで言われてさすがに香子も黙っていることはできなかった。

「では先に戻られたらどうでしょう？ 現時点で青龍様を選ぶことはありませんから」

「そなた……！」

「双方共控えよ！」

朱雀の鋭い声に香子と青龍は黙った。朱雀はそれに嘆息する。

「青龍、此度はそなたに直接関係あることではないかもしれぬ。だがいずれそなたも次代を乞う時期が訪れるのだ。白香を蔑ろにするような発言は以後慎むように」

「……承知しました」

悔しそうに青龍が言う。香子はそんな青龍を若いなと思った。

「そなたもあまり厳しいことを言ってくれるな。我が言われたわけではないが選ぶことがないなど

と言われると切なくなる」

そう言って朱雀は香子を抱きしめた。

「はい、ごめんなさい……」

確かに売り言葉に買い言葉で言いすぎたと思う。香子は少し反省した。

「あの……そろそろ部屋に戻ってもいいでしょうか？」

香子はもう限界だった。

「そうだな。我らも移動しよう」

玄武の言葉に四神がすつと立ち上がる。朱雀は当たり前のように香子を抱き上げた。そして狼狽する香子をよそに、案内する者の後について四神と香子は退室した。

後に残された者たちは四神と香子について三々五々に言い合いながら、やがて広間から去っていった。